



enoco では、2020年2月23日に「おおさかアートコモンズ (仮称) ギャザリング vol.5『大阪の”社会関与型”アートプロジェクト vol.1』」を開催する予定でしたが、新型コロナウイルス感染症 (以下、コロナ) の感染拡大防止のための大阪府の方針に基づき延期としました。しかしながら、コロナの影響が長期化したことから、当初の開催予定日から約1年という時間を経て、最終的にイベントとしての開催は「中止」としました。

代わりにおおさかアートコモンズ「大阪の”社会関与型”アートプロジェクトに関わる人々の井戸端会議」と題して、非公開のオンライン会議を行い、この1年のそれぞれの状況を共有し、これまでと今、そしてこれからに向けて考えていることを話し合う場を設けました。その会議録をオンラインにて公開します。何か結論を出す会議ではありませんが、“社会関与型”のアートに携わる方々の今 (2021年2月) の現状をみなさんと共有できればと思います。

モデレーター

スピーカー

企画アイデア

コーディネーター



山口洋典

立命館大学共通教育推進機構教授



柿塚拓真

豊中市立文化芸術センター / 日本センチュリー交響楽団



松尾真由子

一般社団法人 brk collective 代表理事 / Breaker Project 事務局長



中西美穂

大阪アーツカウンシル 統括責任者



高坂玲子

enoco

井戸端会議に向けての問い (山口さんより)

- 1) コロナは発展の「ピンチ」か「チャンス」か?
- 2) 今後の発展のためには「量の拡大」か「質の充実」か?
- 3) 「これまで」の表現と「これから」の表現は「同じ」か「違う」か?

山口: 私は天王寺の應典院というお寺で10年間働き、今はお寺を離れて、地域社会に学生がどう関わっていくのか大学教育でのコミュニケーションデザインを実践しています。アートの分野で言うと大阪のアーツカウンシルの制度設計にも関わりました。今回はクローズドな井戸端会議ですね。さしずめ井戸はzoomです。コロナ禍で対面での対談ができない今、じっくりお話する場をどうつくるかも大事な視点だと思っています。今回のテーマは“社会関与型”と括弧でくくられているわけですが、この状況において、どんな社会にどう関与しているか、それぞれが社会の現状をどう捉えているか、また関与する以上は良くなってほしい、あるいは少なくとも悪くならないでほしいという願いがあるでしょうから、それぞれの思いに触れることができればと考えています。

開催に先だって3つの問いを投げかけさせていただきました。1つ目は、コロナは発展のピンチかチャンスか、でした。ベストやスペイン風邪とも比較されていますが、過去の巨災では例えば『デカメロン』など、後世に残す作品が産み出されました。一方、コロナ禍は現代社会において近代にもたらされた発展や成長を改めて見つめ直すきっかけとして、何かを生み出すよりはじっくりと考えることが必要だという視点もあります。より良い社会になっていくための関与、そしてその「より良い社会」の「良い」とはどういう状態を想定しているのかについて、近況を伺いながら掘り下げていきましょう。

中西: 近況でいうと、私はようやく博士論文を出しました。病院でのアートプロジェクトに関わっていた時に、アートは良いことだけではないけれど、報告書などでは「良いことであった」と書くということが起り、ずっと戸惑いを覚えていました。それを10年かかってときほぐ

すことができた論文です。日々はアーツカウンシルの仕事に取り組んでいて、そういったことと、今の社会のことがとても繋がっていると感じる瞬間がたくさんあります。どんなふうに言葉にしたり、自分のいくつかある立ち位置の中からどれを使って、その言葉を出していったらいいのかなと考えていたりしています。今回、企画アイデアを担当して山口さんにモデレーターをお願いしましたが、山口さんは阪神・淡路大震災の時にボランティア活動をしていて、それがきっかけで大学院で学ばれたと伺ったことがあり、興味深く思っています。今日少しそのお話も聞けるとよいですね。

山口: 簡単にいうと、土木工学という専門から社会心理学に変えていく手がかりになったということですが、それは追い追い…。

柿塚: 私は日本センチュリー交響楽団の事務局長でもあり、楽団で豊中市立文化芸術センターの指定管理をしているので、ホールのプロデューサーもしています。ご存知のように、コンサートも、私が担当してきた「コミュニティプログラム」というさまざまな人々と交流しながら音楽をやることにも制約が出ています。例えばもともと今回お話することになっていた高齢者の方々と協働するものについては、一時中断、いわゆる本格的な活動はお休み中です。ただ、楽団のオフィシャルな活動ではないですが、楽団員がケアホームと関わっていたことで、運営しているNPOの方と話をし、そこのお庭で演奏するというのをしました。入居者の方は扉越しにホームの中において、演奏家は庭にいるという、直接触れ合うことはできないけれど部屋の内外で交流ができるというプログラムです。アーティストと施設の方々との関係がオフィシャルなプログラムの中で構築されてきて、その関係がオフィシャルではないところにも作用しているというのが見えました。また豊中市から受託している「世界のしょうない音楽ワークショップ&音楽祭」という事業で、大阪音楽大学と楽団とで地域の人と音楽をつくるということを毎年やっています。いつもは大阪音大で年6回ワークショップしていますが、「できる・できない」と状況が二転三転することを避けるため、最初からzoomを使って交流することにしました。

最後だけは広いホールに距離をとって、初めて集まってやりましょうということにしました。ご存知のように、zoom は音楽向きのソフトではないので、逆にその制約の中でどう交流ができるかを考えてやってみたら、それはそれですごくうまくいきました。ブレイクアウトルームを使うことで、普段大勢の中だと埋もれてしまうようなアイデアが見つかったりとか、積極的にリードできる音楽家と控えめな音楽家がいる中で、いつもは積極的な音楽家が前に立つけれど、ブレイクアウトルームを使うと控えめな人の良さががじわっと出るといった空間が生まれたりしました。それは参加者も同じことでしたね。普段と同じぐらい面白いアイデアが生まれて、最後みんなで集まったときには「やっと会えた」という感動もありました。もちろん、これがずっと続くとは困るんですけど、今できるなりの工夫をしているし、無理しているわけではなく、ポジティブに変化についていくことができると感じました。もしかすると、今までの活動の中から「どんなことがあっても面白がっているいろんなことをやってみよう」といった精神が生まれて、こういう状況にも対応できるようになったのではないかと思います。そして、こういう機会なので、アーカイブしたり、残していくことにも時間を使っています。



世界のしょうない音楽ワークショップ

松尾：Breaker Project の事務局、一般社団法人 brk collective の松尾です。Breaker Project は大阪市の文化事業として 2003 年からスタートし、現在は西成区を拠点に地域密着型アートプロジェクトとして様々な活動を行っています。今回お話しすることになっていた kioku 手芸館「たんす」は、西成区山王にある元タンス店を活用した創造活動拠点です。Breaker Project の活動の一環として、美術家の呉夏枝さんに行ったワークショップから派生して生まれたスペースで、2011～2017 年度までの 6 年間アーティストを変更しながら運営してきました。その場所が地域の女性たちの居場所、ものづくりの拠点として根付いてきたこともあり、自治体の予算などに左右されずに継続できる形を模索したいと、2018 年度から Breaker Project のメンバーで立ち上げた一般社団法人 brk collective [ブレコ] へと運営母体を引き継ぎ、活動を続けています。地域の高齢女性を中心とした住民との協働により、個々のスキルや個性を活かした商品の生産・販売等を行いながら、週 2 日ペースでオープンしています。この「たんす」については、ご高齢の方々が集まるスペースでもあるということから、最初の緊急事態宣言が出る前、去年の 2 月末から 3 ヶ月間休館しました。もうひとつ、Breaker Project で実施している「作業場 @ 旧今宮小学校」は、美術家のきむらとしょうじんさんとともに廃校跡にて地域にひらかれた「作業場」として、その場に残る陶芸窯や畑（学習園）、廃棄物、廃材、体育倉庫などを活用してさまざまな作業を通じた活動を行っています。こちらの活動も 3～5 月は中止の判断をしました。活動再開に向けては、アーティストと Breaker Project のメンバーだけでなく、「作業場」に継続的に関わってくれているサポートスタッフやコアメンバーも集まり、今後について話し合う機会を持ちました。そこで、「コロナで活動やイベントは中止になるけれど、生活の中で必要とされている場所、例えばスーパーや銭湯は開いている。作業場も生活の中で必要な場所と位置付けられるようになりたいし、そういう場として開いて

いきたいよね」という話があって、私の中で腑に落ちた気がしました。不安やリスクがゼロになることはありませんが、全て中止にするわけではなく、どうしたら開けていけるかを考えたり工夫しながら、寄れる場や「集まる」ということについて考えていくことが大切だなと思うようになりました。なので、2 回目の緊急事態宣言が出て「作業場」や「たんす」は開けています。実際は来られる方は減っているし、地域外からはあまり来れない状況は続いていて、課題はありますが、今できることをどうやっていくかを考えながら活動を続けています。



作業場 @ 旧今宮小学校

高坂：昨年、ちょうど大阪府のイベント自粛要請、そして政府の自粛要請が出た頃に enoco で Breaker Project の展覧会が開催されていて、二転三転する状況に、ともに対応していましたが、あれから 1 年ですね。enoco は 4 月の緊急事態宣言時から 2 ヶ月弱の休館期間を経て 6 月から再開しました。中止する事業、オンライン化事業、なんとかリアルで実施する事業など試行錯誤です。オンラインになったことで顔を合わせる頻度が増え、これまでより「会える」人もいるし、やりたいことができているという面もあります。前向きに取り組んでいますが、コミュニケーションや対話が不足する中で事業展開で難しいことも起こっています。それに多くの人の安心・安全を確保するという点で、それぞれに考え方があることを実感していて、感覚のすり合わせ、コミュニケーションが必要だと本当に思います。

山口：「コロナはピンチかチャンスか」という問いを出してみましたが、「チャンスにせなしゃあない」、「ピンチやけどチャンスもある」といった具合でしょうか。提供する側・される側といった位置付けだけでなく、その場をともに育む仲間として、一人ひとりを大事にされている姿勢も見えた気がしています。お話を聞きながら思い出したのは「ソーシャルディスタンス (social distancing)」という言葉です。最初は「ソーシャルディスタンス (social distance)」という距離だけが重要とされていたのが、間隔を調整するという意味で現在進行形の「ing」が表現に盛り込まれました。つまり物理的な距離だけでなく、精神的な距離も上手く調整しようということですね。不安な人は不安なのでいくから「大丈夫です」と言っても安心できない場合があります。例えば「この河豚は大丈夫です」と言われても食べない人はいるでしょう。科学的な判断はもちろん重要ですが、社会的・心理的な反応が前に出たとき、その人が周りから区別され生きづらくなることもあるし、周りの心配をよそに「私は大丈夫」と開き直る場合には、互いの精神的な距離がさらに生み出されてしまうこともあります。今の説明は社会心理学の規範理論などに基づいたものですが、「社会関与型」の表現活動は、ささやかな断絶をつないでいくもので、実際に皆さんの現場での工夫にそのエッセンスが詰まっていたと受け止めました。

松尾：私自身、今も自宅と西成以外を歩き来ることが少なくなっています。enoco の利用者は減っていますか？

高坂：減っていますね。展示室と、さまざまな活動に利用できる多目

的ルームがあって、教室を開いている方、趣味の会合をされている方も多くいます。メンバーの年齢が比較的高いからとお休みされる会も多く、会の存続に関わるのではないかと危惧しています。集まらない、練習できない、発表できない、もやもやした状態が続いていると思います。

柿塚：うちのホールも同じような状況です。ただ、やめることなく続いている合唱サークルもあります。さすがに最初の緊急事態宣言の時は休まれていましたが。ただ、同じ団体の中でも、参加者ごとにコロナへの向き合い方が異なることを実感しています。例えば参加者のご家族から「中止にすることはできないか」というご相談をいただいたこともあります。組織としては多数決や代表の方の考えで決められるんですが、そこに自分のご家族がいくのが怖いであるとか、自分が行きたくないという考えもあるわけです。でも直接言うことができないので、市のホールということもあり「施設として中止などの助言はできないか？」と相談して来られるわけです。場所をお貸ししているという立場では「こういう対策をしてください」というお願いまでしかできませんが、そのような電話を受けることがあります。

中西：大阪アーツカウンシルのシンポジウムで、コロナ禍での公立文化施設の状況を演劇作品として上演したのですが、似たような場面も出てきました。本来ならばその人自身が楽しむ芸術や活動であるはずで、芸術を通して社会参加をしているはずなのに、別の方がその方の芸術活動に対して制限してくる状況が今なのかもしれません。たくさんバリアが生まれているということなのかもしれないですね。



kioku 手芸館「たんす」(photo:草本科枝)

松尾：「たんす」でも似たようなことがあり、参加されなくなった高齢者の方がいました。コロナが理由になっているけれど、コロナをきっかけにして、これまでの家族関係や介護の悩み・不満などが一気に噴出してしまったようにも感じました。複雑に絡み合う問題でもあるので一概に良い/悪いは判断できませんが、その方が機嫌よく居られる状況や生活がガラッと変わってしまったので、悔しさとか残念さも感じます。

山口：私が当初専攻していた土木工学は目に見える世界をなんとかしようという学問です。1つ目の問いに重ねれば、土木の専門家は阪神・淡路大震災の際、外科医が重傷の患者を救うために腕をふるうように、傷ついたまちに知識や知恵を活かすチャンスだと思って、より良いまちの姿を追い求めました。ところが、創意工夫を重ねて早く確実な復興を進めようとするれば、一瞬にして奪われてしまった思い出を悲しむ時間すら奪ってしまいます。皮肉なことに、私は震災ボランティアとしてそうした専門家の姿に触れることになりました。将来、自分が目に見える部分だけではなく、見ている風景の中で目が向きにくい部分を大事にしたい、それで大学院で社会心理学を専門とすることにしました。一言で言えば想像力を鍛える、そして言葉にならない思いを言

葉にする、ということです。師匠の渥美公秀先生の言葉を借りると、非常時には日常の課題が濃密にかつ急速に顕在化する、と言います。そうして日の目を浴びる課題は、自分が見ている世界の中で、見えないこと・見えていなかったこと・見ないふりをしていたこともあるでしょう。“社会関与型”のアートもまた、そうして日常ではあまり課題として取り上げられない社会の構造や状況に光を当てていく実践ではないでしょうか。ただ、光と影の関係でいうと、そこに光が当たることによって影も出ます。そうして影の世界に迫りやられたものに注目すると、それまで当たっていた光はどこから来ていたのかと振り返ることもできます。ただし、非常時でも日常でもより良い社会へと導く際には、周囲から批判を受けたくない、正しいことをしたいというささやかな正義感の対決が、生きづらさを余計にもたらしているのではないのでしょうか。何より新型コロナは生死に関わります。その中で社会に関与するアートの展開で大変な工夫をされていることが今回わかりました。そしてそれぞれの活動は一部で個別的な生活に介入する、支援と言わない支援という側面もあるように思われます。レイ・オルデンバーグという社会学者の「サードプレイス」という概念がよく知られていますが、家と職場や学校以外の第3の場があると、人は三角測量のように、情緒的に安定すると言います。ただ、Breaker Projectで着目している銭湯は家の延長とも言えるので、3つの場は必ずしも独立しているわけでありません。逆に、“社会関与型”アートは生活空間を広げるのりしろとなるところにその意義があるかと思います。

中西：社会関与型に”括弧をつけていたのを思い出しましたが、私は社会関与型、ソーシャリー・エンゲージド・アートには懐疑的なんです。今回コロナで色々なことを聞かされた時に、社会とアートが離れていたというわけではなく、社会の中にアートがあった、アートの中に社会があったと思うんです。ですので、関与するとかつなぐというのは、感覚としては少し違うと思っています。ただ、日本において社会とアートをつなぐという考えが出てきたのは、阪神淡路大震災が契機だったので、それは興味深いと思っています。中間支援という部分を既存の言葉で話そうとすると誤解が生まれますし、その誤解がさらに正当化されると寂しく思います。今回、アーツカウンシルでも、大阪府内のコロナの影響に関する調査に加わりまし、大阪府のオンライン配信支援事業でも少し聞き取りもしました。例えば、芸術活動ではなく商売として捉えられていたり、向こうに迫りやられてしまっていた人たちもいるということを知りました。社会関与としては、そうした部分に目を向けていくことも大事ではないかと思います。

柿塚：そういうことで言うと、当たり前ながら、文化・芸術に携わる者にとっては、文化芸術は表現の手段でもあるけれど、生活するための手段でもある。コロナがピンチにしるチャンスにしる、それは後から歴史が評価して、あの時にこういうことが生まれた、発展したと言っているかもしれないですが、我々は当事者として生きていかなければいけません。表現者の生活・生存について、今までは言いにくいところがあったけれど、他の産業と同じように声を上げていっているのではと思っているし、そうしていかないといけないのではないかと思う。文化庁も個人への支援を行いましたし。

高坂：その文化庁の個人への支援（継続支援事業）の美術分野の事前確認番号発行に携わりました。業界団体に所属していなくても、本申請をするための認定番号を出すという仕組みになっていたため、例えばDJやVJといった業界団体がいない方からの申請もあった。ジャンル

違いとして結果として認定はできなかったけれども、どういう活動がされている方が調べていく仕事はまさに「この人がこの人であることの証明」をすることでした。その人がその人であると言うことがとても大事なことであり、表現者として捉えられて来なかった人たちがいるということを痛感した経験です。

柿塚：一人一人の人間であるということが、こんなにも社会の中で生きていくにあたって難しいということを改めて感じましたよね。わかっただけでも、露骨に見せられるとしんどい。それでも活動して、表現できる機会をつくること、その状況を担保し、背中を押すことが大事だと思います。一緒に表現するという事は維持していかないと、すぐに潰されてしまうので続けていかないといけないと思います。

中西：センチュリーのこどもが参加するオーケストラプログラムを毎年視察させてもらっていて、今年も行きました。いつも特徴として、オーケストラの演奏家の中に三角座りをしたこどもたちがいるという風景が生まれているのですが、今年はそうはいかず手でリズムをとる、手拍子で場をつくるということをされていて、まだ洗練されたワークショップではなかったのですが、それを見た時に、コロナ禍でどうしても違うことをしないとなくなってきた時に、音楽という専門性を使いつつも、初歩的なことに戻りつつも、ぐるんと回って、新しいものが生まれた、生まれざるを得ない状況なのだと感じて胸が熱くなりました。イノベーションという言葉で言うともったいないぐらいの「ああ、生まれているんだな」と思った瞬間でした。表現の場の本質に向き合っただけで大事にしておられたように思います。



Touch The Orchestra

柿塚：最初の緊急事態宣言が出た後ぐらいは、第一線の変化の対応が少し落ち着いてきた頃で、勉強したりじっくり考えるには良い時間でした。だから実験が許される状況を使って、いろんなことができたと思います。僕にとっては結構それはいい時間だったんですね。例えばその中で、個人の方から自粛の中でも音楽会をやりたいと依頼をいただきました。庭があって、庭と演奏会場がつながっていて、扉を全部開けたら半分屋外だということで。依頼時は緊急事態宣言中で、3日間の公演の初日の直前に緊急事態宣言が明けました。オーケストラはもちろん、集まってリハーサルすることが難しいので2〜3人で演奏する小さな合奏もできないという前提で公演の内容を決めてきました。リモートでも自分で一人ずつ撮ったものを配信していたような時期なので、何ができるんだろうかと不安もありましたが、どうやればオーケストラのコンサートと言えるのだろうか、音楽家の表現の場づくりができるのかを考えて、一人だけで演奏するコンサートを3回やっただけです。一人だけだったら、家で練習して本番会場に入れば誰とも触れ合わないわけです。バイオリンやチェロであれば一人で演奏できる作品でも200年分のレパートリーがあるのですが、楽器によってはその楽器一本で演奏すること想定していないものもあります。3回というのは、バイオリン、ファゴット、バス・トロンボーンでした。バス・トロンボーンは一人で演奏できるレパートリーが少ないからお客さん

も聞いたことがなくて、おそらく平常時にバス・トロンボーン一本で60分の演奏を聴いてほしいと言うとなかなかしんどいと思いますが、そのころはみんな生の音に飢えていたし、演奏家も普通であれば一人で長い時間演奏するものは受けてもらえないけれど、「今はそういう時間があるだけいい」と引き受けてくれました。乾いたスポンジが水を吸うように、みなさんものすごい集中力で音楽を味わう場が生まれました。100人同時に演奏するのがオーケストラの仕事だと思っていたけれど、こうやって環境が揃えばたった一人で60分舞台に立つということも、オーケストラの表現として、仕事として、ありえるんだなと思いました。そういった発想や考えたりすることができたのはとてもよかったです。生活さえ保証されれば...

松尾：これまでは人がたくさん集まるとか大きいものが注目されやすい思考があったように思いますが、小さいものや定量より定性をいうところに価値の目が向けられるようになってきたのはいいなと思っています。地域の人たちは大きいお祭りをして、500食のたこ焼きを作る、500本のフランクフルトを焼いて、たくさん人が集まるということに価値を感じる傾向があります。そこがコロナで人をたくさん呼べない状況になって、小さな集まりをたくさんつくるという発想が地域の人たちの口から出たのは、功を奏した部分もあるなと感じました。これまでとは違うかたちで人が集まれる場として「作業場」が認識されていけばいいなと思います。ただ、まだまだ今までの価値観が変わることの難しさも感じています...

柿塚：新しいことが少しずつ起きている、そのひとつひとつも大事なんですけど、僕は「オーケストラ」と言うある種保守的な芸術媒体の団体で働いているのですが、今まで反対されてきたことも、「なんだそんなこともできるんだ」と「おもしろいことできるんだ」と捉えられるようになってきました。そういう発想ができると思えたこと、ひとつのハードルがなくなったことは大きいですね。

山口：私は2つ目の問いに、コロナ禍で活動のパートナーはどう拡がりましたか？と投げかけました。これは活動の充実では掛け算が大事だという実感からの問いでした。柿塚さんも松尾さんも「小さいのをたくさん」と重ねる中で、単なる足し算ではなく掛け算として、つまりその場の関わる人の存在や役割を大事にした協働を進めておられます。とかく自治体の文化政策では数で成果が評価されることがありますが、私は作品の制作過程や鑑賞経験を通じて、支援者や協力者と共にアートの価値・意義がどう見出されたかが重要だと捉えています。社会に関わり何かを表現するということは、日の目を浴びない影の部分ににじむ小さなものを放っておかないということでしょう。芸術的に良いものは涙を流し感動するものであって欲しいという声もあるのかもしれませんが、「小さいものをたくさん」することは第三者の感動よりも当事者からの感謝がもたらされる、と思われれます。時には価値や意義がわからないと非難が出てくるかもしれませんが、何より、さらし者にしたと表現者と当事者の分断を生むこともあるでしょう。だからこそ、それぞれの小さな努力が無くなってしまわないために、“社会関与型”での表現者と鑑賞者には、その活動は良いものだとして扱われることへの身構えが必要であるというのが、中西さんの指摘かと思いますが。私は3つめの問いとしてコロナ禍を経てこれからの活動でこれまでの表現と「違うか同じか」を投げかけました。コロナ禍の「禍」は災禍の禍、つまり災いです。禍転じてどうなっていくのか、元に戻すことだけが良いわけではなく、この経験を踏まえてどうするか、あえてしないことは何か。皆さんの展望はいかがでしょうか。

高坂：今日もそうですが、小さく集まることの大切さは改めて実感しています。はっきりとした展望は持てないけれど、自分がいること、目の前に人がいること、それを確認し考え続けていくことを大事にしたいです。

中西：各地で地域アーツカウンシルができています。私はあと1年で任期が終わりますが、4年間でできた知識やネットワークをいろいろな人に渡せるような状態にしたいと考えています。アーカイブで綺麗に渡すのではなく、とにかくいろんな人同士で名刺交換をしてもらおうとか。集中させるのではなく、もらったものをきちんといろんなところに渡していきたいというのが今の展望です。出会うことで紡がれた資源をうまく継承していきたいと思います。

松尾：私もそうですね。目の前にあることを関わっている人たちと話し合いながらやっていきたいと思っています。「作業場」は定期的にオープンしながら、2021年度は、川村文化芸術振興財団のソーシャリー・エンゲイジド・アート支援助成から採択されたプロジェクトが始動します。去年実施する予定がコロナで延期となり、その準備を今、まさに始めているところです。延期になった時は残念に思いましたが、今は1年の準備期間をいただけたと思っています。去年は「コロナでできなくなるかも」と思いながら物事を進めていきましたが、1年経ってみると「どんな状況でもできることをする」という方向に考えられるようになりました。「たんす」についても、文化庁の継続支援事業に申請してECサイトの立ち上げという、ずっと考えながら着手できなかったことを進めはじめました。遠方でなかなか現場に来られない方や活動を知らなかった人たちにも商品を届けられるようにしたいです。また、物理的に距離が取れるように、作業台を増やす準備も進めていて、少しずつでも人が集える状況を作っていきたいと考えています。展望というよりも、少しずつですが、目の前のことをひとつひとつかたちにしていけたらと思います。

柿塚：中西さんがおっしゃる、ソーシャリー・エンゲイジド・アートや社会包摂的な文化芸術活動という言葉はしっくりこない、ということも皆さんも感じていることだと思うし、私も感じています。そういう議論になることはとてもいいですね。同時に、本来は社会とアーツは分けられないもので、近代化の中で専門化・高度化され分かれてきました。その最たるものがクラシックだと思いますが、不自然なほどに乖離してしまい、人々から音楽への主体性を奪ってきたように思います。もちろん、その中で技術が発展してきたものもありますが、そうってしまったことをもう一回元に戻そうとすると、今は今ある言葉として、社会関与であるとか、ソーシャリー・エンゲイジド・アートという言葉が必要なのかなと思います。また、マネジメントの人間としては、世の中を生きている個々の人たちがもう少し自由に、楽に発想や表現ができるようになるまでの間、そうしたある種のインパクトのある言葉と表現の仕方を両方とも担保しながら今を生きていく、みんな変わっていくまでの間をつなぐしかないだろうなあと考えています。コロナ前も決して楽ではなかったですし、コロナがあろうがなかろうがやっていくしかない。例えばコロナが落ち着いたならこんなことしたいという願いも担保しつつ、コロナだから僕らの表現が衰えたということはないということを主張しつつ、両方の気持ちが渦巻いていますが、そういうことをうまくやっていくしかないなと思っています。

中西：少しそれに補足を。私はウーマンリブの時代の芸術活動が歴史

化されていないということを課題と思っています。その人たちのやりかたは、小さいやり方が重なったりしている。そこを評価して歴史化してこなかったこと、70,80,90年代の動きがきちんと評価されず、歴史に書かれてこなかったことがとても今の損失であると思っています。死ぬまでにやりたいことのひとつです。

山口：最後に改めて言葉にこだわると「エンゲイジド engaged」は受動態です。社会に貢献・従事している状態であるという意味ですが、エンゲージリングというのがあるように、婚約という意味もあります。婚約指輪をプレゼントしても、受け取ってもらえないと、単なる形だけの貴金属となってしまいます。したがって、ソーシャリー・エンゲイジド・アートでは向き合う相手を大切に思う必要があると言えます。そもそもソーシャリー・エンゲイジド・アートは、高級芸術などと訳される「ハイ・アート」と大衆芸術とが区別し序列化されてきたことに対する反動の一つとしても位置づけられるでしょう。ただ、この新しい概念が既存の枠を壊すためではなく、むしろ新たな枠をつくり垣根となっている気がしています。社会に関わる表現では、今の状態をより良くする担い手が分断の要因を生まぬよう、過去から蓄積されてきた歴史や文化への敬意を払うことが極めて大事です。このオンラインでの井戸端会議でも、どの井戸に集っているかという手段ではなく、何を大事にしている人たちが集うかという目的が重要でした。同時に、今日は新たな概念で実践を型にはめるカテゴリー化の乱暴さ、またそれによって区別してしまうことの問題と、むしろそうした潜在的な問題に丁寧に向き合っている皆さんの存在が改めて顕在化できた気がしています。今日はありがとうございました。

#### 参考サイト：

> 日本センチュリー交響楽団

<https://www.century-orchestra.jp/>

> 日本センチュリー交響楽団コミュニティプログラム

「お茶の間オーケストラ」

[www.century-orchestra.jp/topics/otyonom/](http://www.century-orchestra.jp/topics/otyonom/)

> Breaker Project 「作業場」

<https://breakerproject.net/project/sagyouba20-21.php>

> 創造活動拠点 kioku 手芸館「たんす」

<http://tansu.brk-collective.net/>

> 公文協シアターアーカイブス

\* 日本センチュリー交響楽団のプロジェクトに関するインタビューや演奏の映像を視聴できます。

<https://syueki4.bunka.go.jp/video>



発行：大阪府立江之子島文化芸術創造センター [enoco]

発行日：2021年3月31日